文献解題

『復刻版　近代日本地誌叢書　東京篇　全42巻』
（龍渓書舎編集部編，龍渓書舎，平成4年7月～平成5年11月）

本叢書は，明治11（1878）年11月の区郡制改正を中心として，同後期および大正時代にまで及ぶ，東京の生活に関わる資料55点を総集して，それらを原文に忠実な復刻版として刊行されたものである。内容は，町鑑類，繁昌記・案内物，地名・公文書類，散文・作品類からなるが，いずれも稀覯書ぞろいである。

たとえば，明治7年刊行の大和屋喜兵衛・源助の『東京開化繁昌誌』をはじめとして，明治31年刊の大橋義一『東京古蹟誌』には，凶悪の賊徒・情死の男女の供養塚も掲載され，また英文による紹介「シティ・オブ・トウキョー」を付した明治34年刊行の上田惟暁『東京名所独案内』などにも目を瞠る。さらに，目黒・渋谷・板橋・すがも・蒲田・八王子などの町誌・郷土史もそれぞれ一巻をなしていて，郊外発展の模様をつぶさに知ることができる。写真・版画などの視覚資料はもとより，各種統計資料，職業一覧，交通図も便利で，明治・大正期の都市東京の姿を知るうえで基礎的な文献と言えよう。

日清・日露の戦争を経て，近代日本の地位が高まるにつれ，パリ・ロンドン・ニューヨークなどの世界の大都市と肩を並べようとする意識の高揚，また修学旅行として東京が対象化されるなかで，二重橋・靖国神社，明治神宮などを媒介にナショナリズムの教育に配慮した東京案内が前景化されるなど，本叢書を読む興味は尽きない。

さらに，この叢書と同時に朝倉治彦・槌田満文監修による『文学地誌「東京」叢書　全12巻』（大空社）も購入した。こちらには，明治7年から14年にかけて刊行された服部誠一『東京新繁昌記』全7冊をはじめとして，明治44年刊行の若月紫蘭『東京年中行事』上下巻や，資生堂化粧品部を発行所として大正10年に刊行された『銀座』などが含まれている。巨大に変貌しつづける東京＝日本の原点を探索し，すでに地上には痕跡をとどめない街・建築・景観の変容をもとにして，まさしく記憶の都市をふりかえる資料であろう。（日高昭二）

『世界の文字と記号の大図鑑—Unicode 6.0 の全グリフ—』
ヨハネス・ベルガーハウゼン，シリ・ポアランガン（日本版監修　小泉均）研究社 2014 年 8 月 29 日発行

この図鑑はこの世に現れた文字だけではなく，さまざまな文字＋記号の集大成である。副題から分かるように，基本的にはユニコード 6.0 版に収められている文字・記号のコレクションである。ドイツ語の原題は *decodeunicode-Die Schriftzeichen der Welt* であるから「ユニコードのデコード＝解読」と言ったところだろうか。1025 ページにわたって，109,242 個の文字・記号の一覧とまだユニコード化されていない（コード番号が付されていない）書記体系の紹介が含まれている。

文字の形を字体と呼び，字体に一定のスタイルでデザインを施したものを書体（フォント font）と呼ぶ。字形は JIS によると，「字体を，手書き，印字，画面表示などによって実際に図形として表現したもの」である。また個々の字形（文字イメージ）をグリフ（glyph）と呼ぶ。したがってフォントが同じでもグリフが同じとは限らない（例　標準体とイタリック体）。一般にフォントはグリフの集合体と考えられる。グリフは文字だけでなく，記号をも指す。本書は正確には，ユニコード化されたグリフの集大成である。ちなみに 1 番目のユニコード文字は文字列制御のためのヌル文字（U＋0000）である。

本書を開いて驚愕すべきは何と言っても漢字の多さである。私たちが普段漢字と言っている文字はユニコードでは CJK（中国語，日本語，韓国語の頭文字）と呼ばれる。ハングル文字は別にコード化されている。本書の大半は CJK の一覧である。分類の方法は不明であるが，CJK 統合漢字に 20,940 字，統合漢字拡張 A には 6,582 字，統合漢字拡張 B に 42,711 字，統合漢字拡張 C に 4,149 字，統合漢字拡張 D に 222 字，互換漢字に 470 字，互換漢字補助に 542 字など総計 76,301 字に上る。ハングル文字関連はハングル字母 256 字，ハングル音節文字 11,172 字がコード化されている。漢字・ハングル文字はユニコードの大口消費者である。また面白いところでは私たちが携帯等で良く目にする絵文字にもユニコードが付与されている。点字も例に漏れない。

ユニコードは現在ではメールなどインターネットの文脈で言及されることが多いが，時にはこうした文字や記号を，特に漢字を，形（デザイン）として眺めてみるのも面白いであろう。

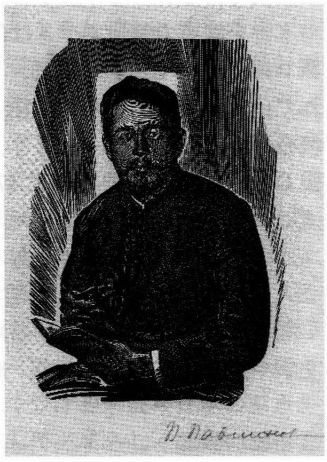
（三星宗雄）

『魯迅藏外国版画全集』（全5巻）李允経，李小山主編
湖南美術出版社　2014年（787 mm×1092 mm）

魯迅（本名：周樹人　1881～1936）は，近代中国の思想家，文学者であると同時に，中国屈指の版画啓蒙家，収集家でもある。後者としてはあまり日本では知られていないようだ。本書は中国でも初めて出版された魯迅所蔵の版画全集である。この全集の刊行により魯迅コレクションの全貌が見え，美術史関係だけでなく，魯迅の美術に対する考え方，日本を含む世界の芸術家との交流の一端も見えてくる。各巻の内訳は『第1巻 欧米版画巻（上）』，『第2巻　欧米版画巻（下）』，『第3巻　ロシア版画巻』，『第4巻　日本版画巻（上）』，『第5巻　日本版画巻（下）』となっている。収録された全作品は1677点である。世界14か国251名の画家の内，日本人版画家は138名含まれている。その中には，若き頃の石井鶴三，恩地孝四郎，関野準一郎，田辺至，永瀬義郎，前川千帆，棟方志功など後に昭和時代の日本を代表する版画家たちがほとんど網羅されている。美術史資料としてだけでなく，文化交流史研究の資料としても活用されることが期待される。

「ドイツの子供達が飢えている」
（リトグラフ）Kathe Kollwitz
北京魯迅博物館藏

「開港偶人」（木版）
加藤悌
北京魯迅博物館藏



「チェーホフ像」（木版）
Павел Яковлевич Павлинов
上海魯迅記念館藏

（彭国躍）